めだかの列島
～上五島・長崎巡礼②～

長崎市の北西海上約百キロにある五島列島は、有人や無人の島百四十余からなる。

中でも大きい島、北から中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の五つの島を総称して五島と言っていたことから「五島列島」と呼ばれるようになった。

日本列島と同じように南北に長く、若松島より北を〝上五島〟、奈留島より南を〝下五島〟という。

十年ばかり前に下五島を旅した時は五島列島で一番大きな島、福江島を訪ねた。島の中心は福江市、しかし今は福江島以外の久賀島、奈留島も一緒になって「五島市」となった。

同様に福江島の次に大きな島、中通島は「上五島町」であったが、隣りの島、若松島の若松町と合併して、今は「新上五島町」となっている。

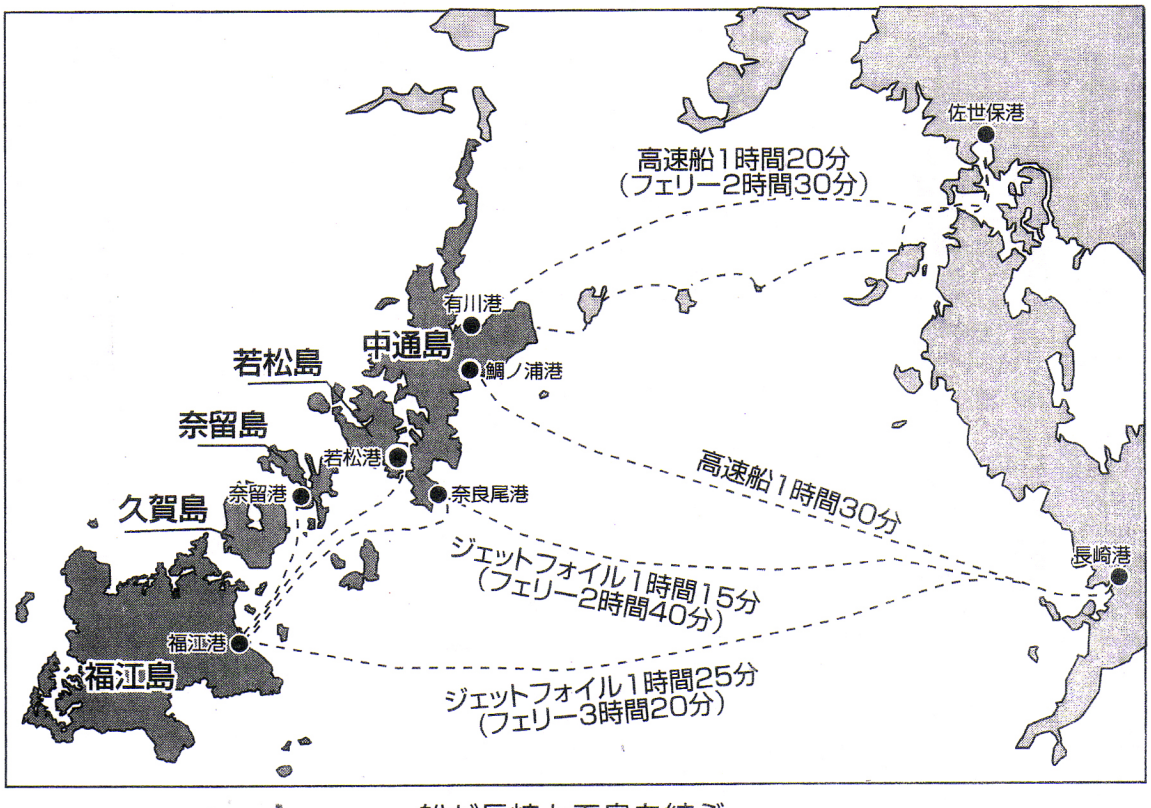
最近は合理化のための市町村合併で昔からの地名や町名が軽んじられる傾向があるが、それによって地域文化、伝統文化までも失われ、画一化される傾向は残念である。

なお、中通島と若松島は一九九一年（H3）に若松大橋が完成し、陸続きになっている。

さて、五島列島への交通の便であるが、福江島に空港もあるが、ほとんどは船。長崎・佐世保からフェリーで約二時間半、高速船なら約一時間二十分である。

今回の上五島へ旅は七月三十一日朝六時四十分に下松の自宅を車で出発。佐世保からはフェリー、上五島の表玄関、有川に着いたのは午後三時二十五分。こうして上五島・長崎四泊五日の旅がスタートしたのである。

ところで「めだかの列島」という本を読まれたことはないだろうか。一九四六年（S21）生まれ、福江島出身のノンフィクション作家、今井美沙子の処女作である。



船が長崎と五島を結ぶ

彼女の母親の先祖は江戸時代中期にカトリックに改宗して以来、キリスト教信仰禁止の中を百年余にわたって、徳川幕府と大村藩の厳しいキリシタン弾圧の中をひたすら逃れ続け、信仰を守った。

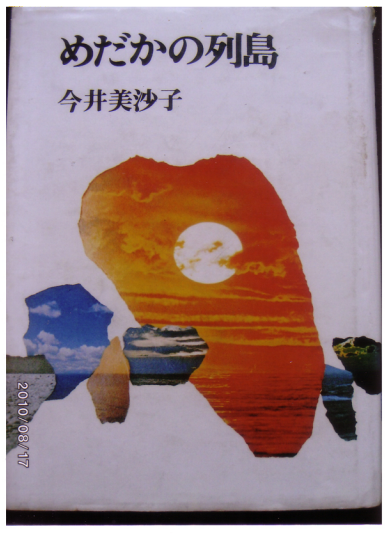
母親は娘の美沙子に「イモと麦を食べながら、神様に近づこうと一生懸命生きてきた五島の人間の心意気、五島の女の無念さを書いてくれ」と何度も言ったという。父親もまた「戦後十年たっても五島にはパンツも着とらん子どもがいたことを書いてくれ」と。

終戦後の日本はどこも貧しかった。とりわけ離島の五島は交通の便も悪く、復興も遅れ貧しかった。

めだかのようなちっぽけな島、五島列島でめだかのような人間たちが肩を寄せ合って暮らした当時の様子を、両親の希望でもあり、五島を知らない人々に少しでも知ってほしいという願いを込めて「めだかの列島」を書きつづったという。

当時の貧しい様子もさることながら、私にはその中で生き生きと神に絶対の信頼を寄せて素朴に生きた人々に感動させられ、今回の巡礼の旅を豊かにしてくれた。なお「めだかの列島」はもう絶版で本屋にはないが、周南市の中央図書館には置いてあった。

（元山口放送取締役ラジオ局長）



五島を紹介した「めだかの列島」